

学校の概要（平成15年4月現在）

学校名	巻町立巻西中学校					教員数 34
学年	1学年	2学年	3学年	特殊学級	計	
生徒数	171	187	171	4	532	
学級数	5	5	5	2	17	

研究の概要

1 研究主題

学びの姿勢を育てる指導の工夫
～ 学び方を習得し、わかるまで、できるまで学ぶ生徒の育成～

2 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

2 学年英語（TT 指導体制で行っており、少人数指導が可能であるため）

3 学年数学（TT 指導体制で行っており、生徒の習熟度の開きが大きな教科であるため）

(2) 年次ごとの計画

平成15年度

テーマ **学びの姿勢を育てる指導の工夫**
- 学び方を習得し、わかるまで、できるまで学ぶ生徒の育成 -

研究の見通し（仮説）

生徒一人一人の理解や習熟の程度に応じた繰り返し指導や、体験的・問題解決的な学習過程を工夫してきめ細かな指導や教育活動を計画的に実践すれば、生徒は基礎・基本や学び方を習得し、ひいては「確かな学力」の向上が図られるであろう。

研究の内容・方法

【研究内容】

研究主題・副題の「学びの姿勢」「学び方」と本校における「基礎・基本」「確かな学力」のとらえを明確にする。

習熟度別指導、課題別指導の先行研究に学び、個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫改善を図る。

小・中・高の連携によって、特に発展(応用)コースの課題づくりを進める。

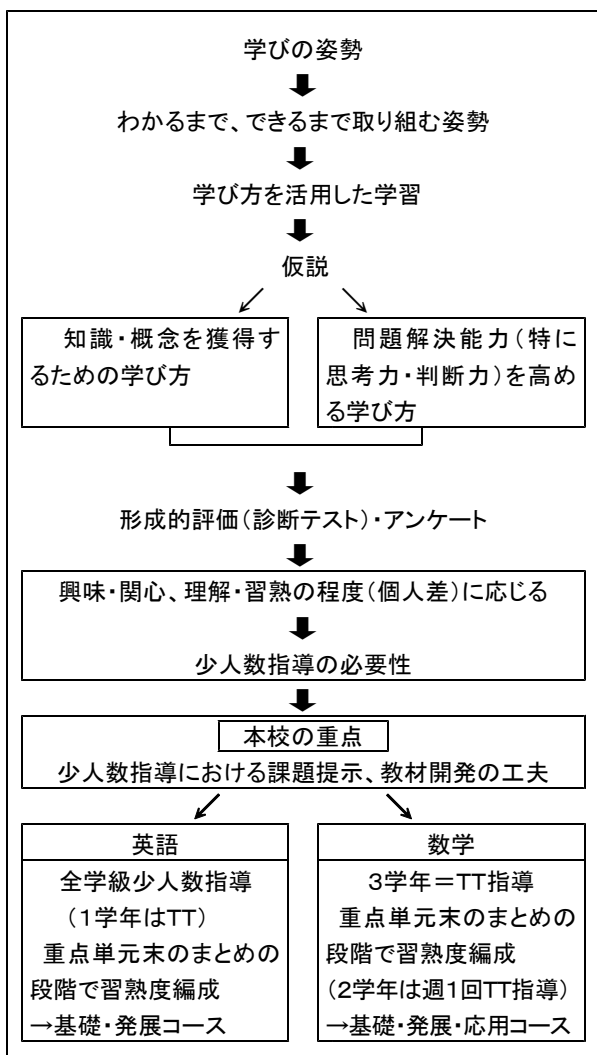
【研究方法】

各教科部でとらえた「学びの姿勢」「学び方」、確実に身に付けさせる「基礎・基本」についての共通理解を図る。

課題提示、教材開発の工夫にあたり、英語部、数学部においては習熟度別、課題別指導の重点単元（英語部4単元、数学部3単元）を設定する。開発に当たっては、小学校や高校の教師のアドバイスや支援を受ける。

（小・中・高連携事業）

各教科部で評価計画表を作成し、習熟度のとらえ方や形成的評価（診断テスト）や自己評価の工夫改善を図り、個に応じた指導が効果的であったかどうか、生徒の変容を把握する。



平成16年度

テーマ 学び方を身に付ける指導法の工夫
- 思考力・判断力・表現力の伸長を目指して -

研究の見通し(仮説)

一年次の研究の成果を生かし、研究テーマ追究のため、「学び方」を焦点化する。そのため、各教科部で「思考力」「判断力」「表現力」を高める学習課題やその提示方法を工夫することで「学び方」の習得を図る。

研究の内容・方法

【研究内容】

昨年度の反省を踏まえ、「学び方」のとらえを「思考力」「判断力」「表現力」の伸長を中心に進め、「確かな学力」につながるよう問題解決的な学習過程を工夫する。

年間指導計画(評価計画)に、習熟度別指導、課題別指導で行う単元を位置づけ、昨年度の実践と比較検討(少人数指導の教育的効果)をする。

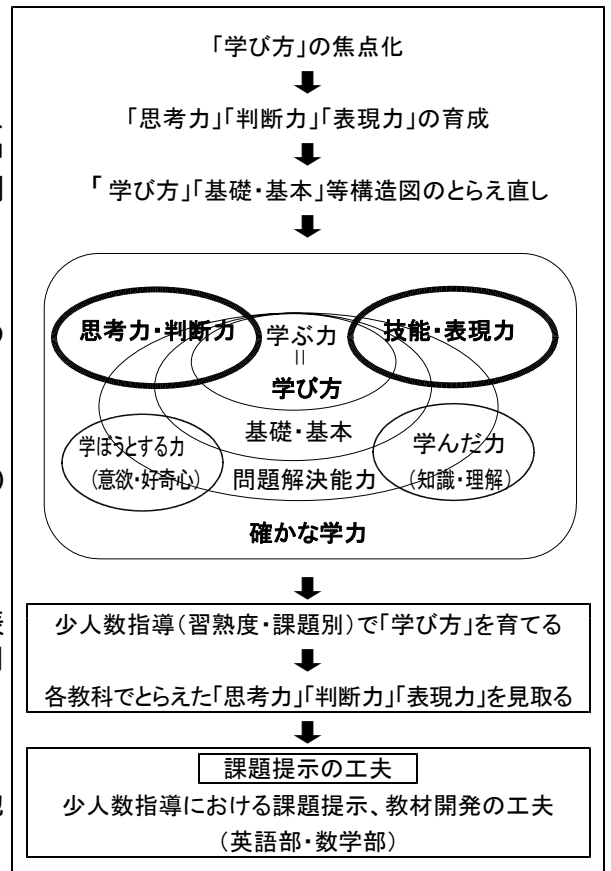
小・中・高の連携によって、特に発展(応用)コースの課題づくりを進める。

(継続事項)

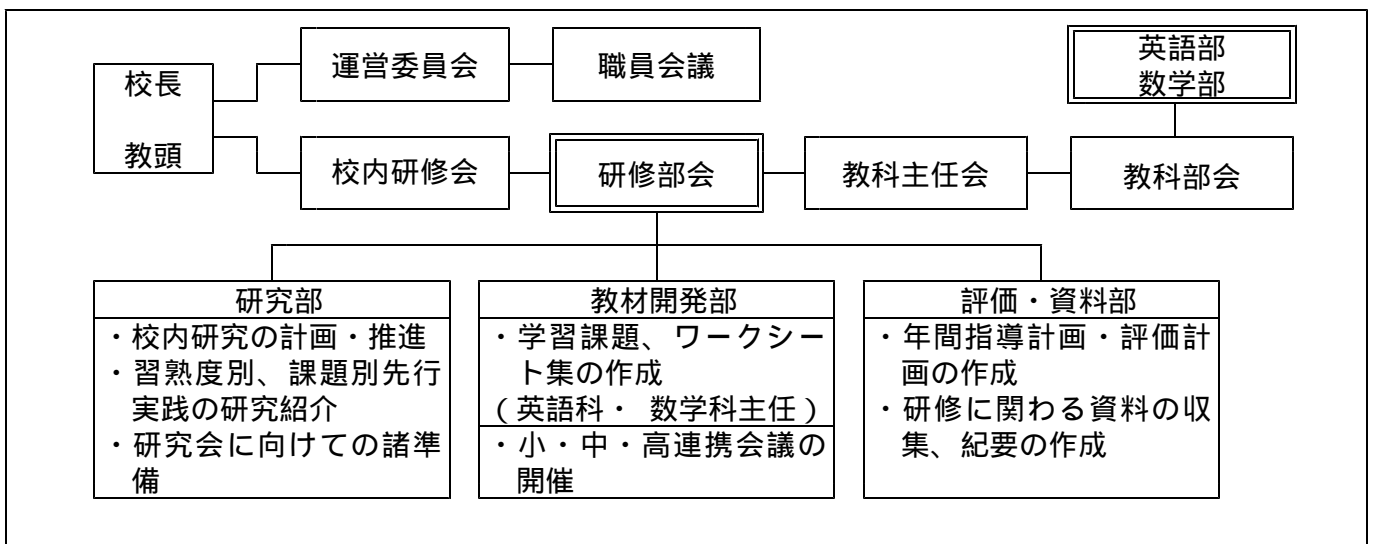
【研究方法】

各教科部でとらえた「思考力」「判断力」「表現力」の伸長を図るために、特に発展コース用の教材開発を行う。

習熟度別、課題別の教材(ワークシート集)を作成し、2か年の成果とするとともに、地域の中学校に普及する。



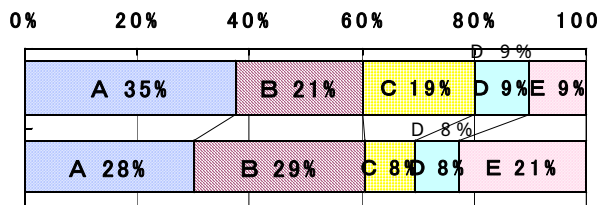
(3) 研究体制



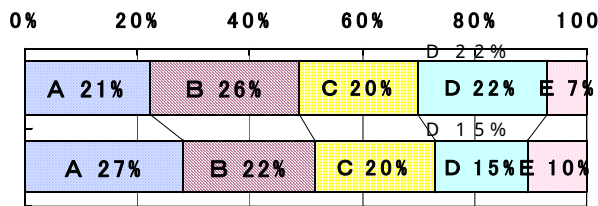
平成15年度の研究の成果及び今後の課題

1 研究の成果

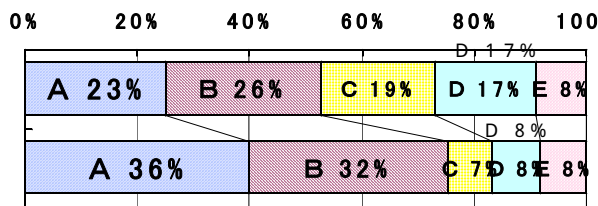
今年度は、英語部、数学部で設定した重点単元の終末段階で習熟度別、課題別による小集団指導をおこなった。図1から図5は生徒を対象として学期末に実施したアンケート結果(A B C Dの4件法で調査。Aの方がプラス・肯定的評価、Dの方がマイナス・否定的評価、Eは「わからない」を示す。)



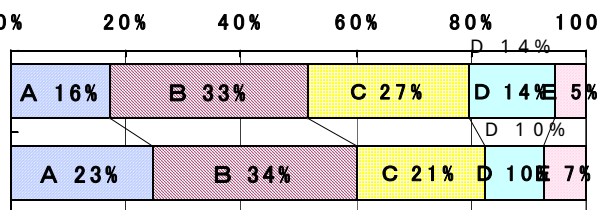
＜図1 興味・関心、理解度に応じたコース選択学習：1年＞



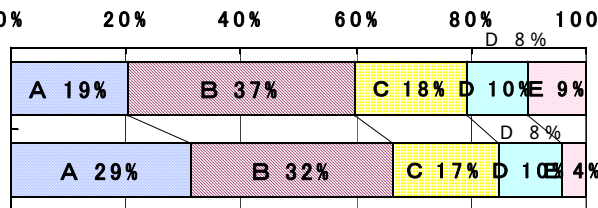
＜図2 興味・関心、理解度に応じたコース選択学習：2年＞



＜図3 興味・関心、理解度に応じたコース選択学習：3年＞



＜図4 2年 英語の授業の理解度＞



＜図5 3年 数学の授業の理解度＞

るように勧め、6割未満であれば基礎コースを選択するようにアドバイスした。しかし、7月は基礎コースに集中したため、その意味が薄れたが、10月、11月と回を追うにつれ、適正なコース選択ができるようになった。

表1 2年英語習熟度別授業(7月:未来形 11月:不定詞)における学年アンケートの推移

項目 (ただし、(1)～(4)はA(よくできた)のみの結果)		7月:未来形		11月:不定詞		推移	
		基礎	発展	基礎	発展	基礎	発展
(1) 意欲的に参加できたか	A よくできた	44%	64%	37%	66%	-7	+2
(2) 人の発言が十分聞き取れたか	A よくできた	52%	64%	54%	56%	+2	-6
(3) 積極的に発言できたか	A よくできた	30%	45%	49%	56%	+19	+11
(4) 書く活動で、作文をつくれたか	A よくできた	33%	50%	37%	41%	+4	-9
	B かなりできた						
	C あまりできなかった						
(5) be going to～の表現(11月:不定詞の表現)を会話の流れに応じてうまく使えるようになったか	A よくできた	38%	55%	46%	47%	+8	-8
	B かなりできた	56%	40%	50%	53%	-6	+13
	C あまりできなかった	6%	5%	3%	0%	-3	-5
(6) 不定詞のまとめの問題はよくできたか	A よくできた			42%	58%		
	B かなりできた			50%	39%		
	C あまりできなかった			7%	3%		
(7) 不定詞を用いて自分の考えた英文を作れたか	A よくできた			39%	46%		
	B かなりできた			51%	53%		
	C あまりできなかった			8%	2%		

を集約したものである。「一人一人の興味・関心や理解度に応じた小集団学習は学習に役立つか」との設問に対しては学年を追うにつれて好意的に受け止めていることがわかる。

特に習熟度別は単元の終末段階に位置付けたが、習熟を図るという点からもこの段階での実施が効果的であると言える。

数学部のアンケートでは、コース別課題学習を「よかった」と受け止めている生徒の割合が8割を上回っている。それは生徒がこの学習の意義や方法を正しく理解して、個々の能力や興味・関心に応じた学習であったことからであると考えられる。

また、「基礎コース」では課題を検討することで、日々の授業での指導内容が生徒にとって適切であるかどうか教材研究に生かすことができた。さらに、「発展コース」では学習指導要領の内容を越えた課題を盛り込むことができた。

一方、英語部のアンケート結果が下の表1である。単元や課題の難易度が違うために一概に結果を比較することは好ましくはないが、(3)の「積極的な発言」は、基礎・発展両コースが数値の伸びを見せているように、重点単元ごとに習熟度別指導を行ってきた成果の一端と言える。

また、言語材料の運用方法(質問項目(5))についてはC(よくできない)の割合が発展コースにおいては0%となり、基礎コースにおいても3ポイント低くなっていることから、習熟の程度が高まっていると言える。

コース選択の仕方に関して数学では基礎・発展・応用3コースの平均値(7月、10月、11月)が「友人の選択を参考にした:5%」「先生のアドバイスを参考にした:2%」「選択に悩んだ:43%」「悩まずに選択できた:40%」となっており、選択の難しさを反映しており、適切なコースを選択しているかどうか一概には言えない。

英語部では形成的評価(事前テスト)を行い、8割以上の正答率であれば、発展コースを選択する

2 今後の課題

今年度から2教科で習熟度別・課題別小集団指導を実施して、その成果は前述のように確認できたが、教員数や教室の関係から他の教科も同様に行うことは不可能であるので、次年度も英語・数学でおこなう。英語では「基礎コース」「発展コース」の2コースを設定したが、「基礎コース」の中でも習熟の度合いが、大きく3段階に分かれてしまい、指導が行き届かない面が残ったので、基礎コースの課題提示を更に工夫していく必要がある。また、発展コースで学習した方がよいと思われる生徒でも基礎コースにとどまっている生徒が完全になくならなかったことから、適正なコース選択ができる方策を工夫検討したい。

数学では基礎・発展・応用の3コースを設定した。その中で応用コースの課題設定のねらいが十分に明確にできずに終わってしまったことが課題として残った。したがって、生徒もまた、コース制の意図するものをつかめずにグループ内での学び合いや助け合いが深まらなかった。

その他、「指導者もコースの数だけ必要である」「コース別の教材作成にかなりの時間を要する」「単元終了後に2時間のコース別学習を行ったことで、必然的に全体の指導進度が遅れてしまう」などの課題が出てきたので、次年度に向けて改善策を検討し、実践する。

学力把握のための学校としての取組

全国標準学力検査（NRT）の実施＜4月＞と各教科部による結果分析
定期テストを主とする観点別評価項目別の改善と結果分析

フロンティアスクールとしての研究成果の普及

平成15年度

(1) 中間発表会の開催

日時：平成15年11月14日（金）13時30分～16時30分

会場：本校

公開授業 英語 数学（学力向上フロンティア事業） 国語 社会 理科 学級活動（拡大中学校区訪問授業）

参会者 下越教育事務所指導主事4名、PTA関係者5名、町教育委員会関係者6名
大学教授1名、一般教職員（本校を除く）90名 計106名

平成16年度

(1) 校内研究会の開催

1学期 1回（国語、理科、技術・家庭） 2学期 1回（社会、音楽、美術）

会場：本校

研究主題： 学び方を身に付ける指導法の工夫（仮題）
- 思考力・判断力・表現力の伸長を目指して -

(2) 最終発表会の開催

日時：平成16年11月12日（金） 公開授業 英語、数学

会場：本校

研究主題：同上

(3) ホームページ上での成果と課題の公表（研究内容、研究方法等を含む）

<http://mercury.jstar.ne.jp/~m7nishi/index.html>

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

- | | | | | |
|----------------------|---------------------------|------------------------------|------------|-------------|
| 【新規校・継続校】 | ✓ 15年度からの新規校 | 14年度からの継続校 | | |
| 【学校規模】 | 3学級以下
7～9学級
13～15学級 | 4～6学級
10～12学級
✓ 16学級以上 | | |
| 【指導体制】 | ✓ 少人数指導
その他 | ✓ T・Tによる指導 | | |
| 【研究教科】 | ✓ 国語
外国語
保健体育 | 社会
音楽
その他 | ✓ 数学
美術 | 理科
技術・家庭 |
| 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 | ✓ 有 | 無 | | |